

令和7年7月9日

秋山卓男

北川民次氏と学芸員塚田美紀さん

こういうこともあるんだ。世田谷美術館学芸員塚田美紀さんと北川民次氏（1894～1989）の不思議なご縁だ。

塚田美紀さんは東京大学大学院教育学研究科修士課程に在学中（1995卒業）恩師の佐藤学先生から勧められた「絵を描く子供たち」著者北川民次 1952年12月10日第1刷発行岩波新書を幾度もむさぼるように読み感銘を受けた。そして、彼の教育活動をテーマに修士論文を書いてしまった。その後諸事情によって研究は休止状態で時は過ぎた。この度、名古屋市美術館から北川民次氏の回顧展をいっしょにやりませんかという誘いを受け今回の「生誕130年記念北川民次展—メキシコから日本へ」（会期2024年9月21日～11月17日）に結実した。

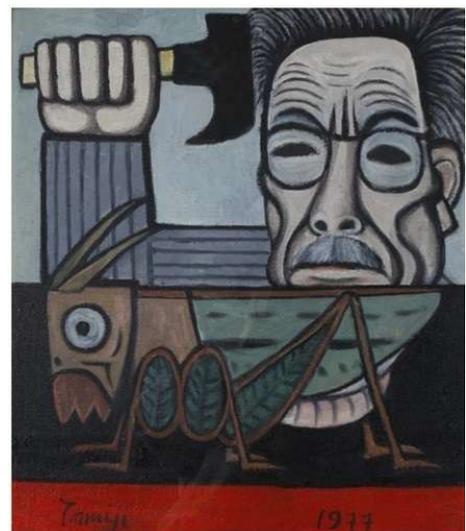
そして、塚田美紀さんによる世田谷美術館紀要第26号に掲載された「渡米前後の北川民次—1910年代の静岡、サンフランシスコ、ポートランド、ニューヨーク」の論考となった。この論考を読んで驚いたのは北川民次氏の著述の多さである。

「わが師の恩」「青春に大きな影響」「歯に噛み砕いてもらった思い出」「故郷の茶園」「驢馬のたわごと 北川民次随筆集」等々がある。塚田さんはこれらの文章から丁寧に拾い上げ北川氏を紹介している。彼女はこの展示会を契機として北川民次氏に対する研究心が再燃し、氏に関することは何でも知りたいという情熱となった。

特に静岡商業時代の3年間は最も多感な時期で、人格の形成期であり強く興味を持った。静岡百年史からの抜粋で、太田喜和治氏という教員が北川氏との会話をエッセイとして掲載している。静岡駅から金谷駅までの2時間半にわたる道中での会話を記したものである。

現在では両駅間は30分であるが、当時は2時間半もかかったのであろうか。往復5時間である。また、当時は五和村から金谷駅までの交通手段である大井川鉄道もなかった。通学に大変な時間と労力がかかった。反面この時間を思索と読書に充てれば飛躍的な人間成長の糧となる。彼の哲学的思索力、文章表現力はこの通学時間によって養成されたものであろう。

また、静岡商業では外人講師による週8時間の英語授業があった。この授業によって培われた英語力はアメリカで即役に立ったことであろう。いずれにしても偉大な教育者であり、哲学者であり、画家である北川民次氏の基礎は静岡商業3年間によって形成されたものであった。



「バットと自画像」 1977年作



「愛情」北川民治（大正元年度卒）画（個人蔵）